



# 2020 南房総 昔物語の絵本化事業 「南総の昔話・民話集」の制作



子の娘が子供らに字を教える ～南総昔話・民話集 25「子の娘」より～

## 実施者

### ＜教員・参加者＞

聖徳大学短期大学部 総合文化学科 図書館司書プランチ、図書館司書・IT コース 1・2年（山本、丸林、宮城、竹内、田口、林、福島、吉野、黒川、小島、徳嶋、菅野、熊谷、峰岸）、ファッション・デザイン造型コース（篠塚）  
指導教員：正道寺康子、碁石雅利

### ＜協働パートナー＞

【行政関係】南房総市役所市民生活部市民課

【個人】生稲謹爾氏（資料提供）

## 背景と目的

南房総市の昔話を調査して絵本化し、南房総市内の小学校や幼稚園・保育所などに寄贈する。本学総合文化学科教員の持つ知識と技能、学生の活力と創造力によって制作された絵本を通して、南房総市の子どもの郷土への関心や郷土愛の向上を促し、地域活性化に貢献していくことを狙いとして実施したものである。

絵本化した作品の原本は、南房総市に在住する昔話研究家、生稲謹爾氏著『南房総市の昔話 第1集』（2016年、NPO法人富浦エコミューゼ研究会）に分類された富浦以下7地区の昔話であり、その中からそれぞれ1～2話ずつ選定し、2020年度は8作品を制作した。それぞれ250部を南房総市役所担当者へ送付し、各機関への配布を依頼する予定である。

## 【2020年度作品とあらすじ】

### ① 南総昔話・民話集 25「子の娘」（和田）

鎌倉時代、和田の浜辺に打ち上げられた舟に乗っていた子の娘を村人が介抱するが、やがて娘は亡くなる。村人は社を建てて娘の霊を祀る。娘が手に持っていた黄色い花が育ち、村全体を黄色く染めた。

### ② 同 26「枇杷落とし哀話」（富山）

昔、岩井の小浦の海に沿った崖道に、座り込んでいた老父とその娘に農婦が枇杷を与える。崖へと転げ落ちた枇杷を取ろうとした

父娘は、突風にあおられ転落死する。翌朝、父娘の手には枇杷がしっかりと握られていた。

### ③ 同 27「大太法師」（富山）

昔、大太法師という巨人が上総から安房へと歩いて岩井の浜辺に着き、富山を枕にして、こんこんと眠り続ける。村人たちが、大太法師の足裏に付いた砂を落とし始めたところ、くすぐったくなった巨人が目を覚ます。起き上がると、雲をつく背の高さであった。

### ④ 同 28「茶釜の尻を叩く」（丸山）

昔、丸村に頭の少し弱い婿がある日、実家へ行った帰りに、父親から大きな黒牛を一頭もらい家路につく。牛は草を食べながら山へ入って見失う。それを奥さんに話すと、牛をもらったら、縄で縛って引いてくるようにと言われる。再び実家に行き、もらった茶釜を引いて帰るが、動かないため、茶釜を縄で縛って引き始めてしまう。

### ⑤ 同 29「おおさの根の主」（白浜）

### ⑥ 同 30「馬がかわいそう」（三芳地区）

### ⑦ 同 31「雀を追っ払う」（三芳地区）

### ⑧ 同 32「毛林寺の大蛇」（千倉地区）



南総昔話・民話集（2020年度作品）



おおさの根の主は嵐も予告してくれる ～同 29「おおさの根の主」より～



大声をあげて雀を追っ払おうとするが… ～同 31「雀を追っ払う」より～



大太法師の足裏から砂を落とす ～南総昔話・民話集 27「大太法師」より～



妻から忠告される婿 ～同 28「茶釜の尻を叩く」より～



石白を担ぎながら馬に乗ろうとする ～同 30「馬がかわいそう」より～



大蛇は兄をひと呑みにしてしまった ～同 32「毛林寺の大蛇」より～

## 成果と課題

### ●地域貢献面

南房総市への貢献は、絵本の反響等によるが、測定に至っていない。本年度は松戸市岩瀬自治会の文化祭において絵本を展示し学生が来場者対応を行って南総の昔話を知ってもらう機会を設けた。

### ●教育・研究面

絵本制作を通じて創造力を開発し、PC活用の技能を習得することができた。

### \*表彰・マスコミ掲載など

・特になし

### ●課題

実地踏査の機会を持たなかったため、実際の見聞を活かすことができていない。

### 今後の展開

現地の取材を通して絵本の続編を作成するとともに紙芝居にも取り組み、読み聞かせの機会を持つ計画である。